

下野百人一首
全



正五位佐藤暢君題
從四位戶田忠友大人題
正五位木居豐穎大人題
松五園加藤安彦大人題
猿山義明編輯

下野百人一首全

猿山藏版

猿美



丙申春月

孫陰



乙卯年二月廿

初九日

乙卯年二月廿

初九日

乃

みくみかけ

みみみみ
みみ

豊
納

Yonkeki 1225

下野百人一首と見て

七十八
安彦

いりくふ言葉の

みみみ
みみ

いりくふの
みみ
みみ

猪心義明ゆへハ下野國下郡カズ郡
大字村の人ヨリヨリ歌を嗜むるもの
ありし國人の歌をも成あつめく下野
百人一首をふ書をとものて予より
ち玉せよと請ふる予えより歌の道不
嗜くしてそより何ハわきまなく作をも
我々下野小歌をむく百人ふまらぬ
かひてありしよりまさうりて以て嬉し
又義明ゆへハ此書成るものせしむるハ
世々推許て歌人の多きと歌乃下野
一歌よ請ふるよハよ書何れハ只あく

下野國下郡カズ郡

猪心義明ゆへハ下野國下郡カズ郡
大字村の人ヨリヨリ歌を嗜むるもの
ありし國人の歌をも成あつめく下野
百人一首をふ書をとものて予より
ち玉せよと請ふる予えより歌の道不
嗜くしてそより何ハわきまなく作をも
我々下野小歌をむく百人ふまらぬ
かひてありしよりまさうりて以て嬉し
又義明ゆへハ此書成るものせしむるハ
世々推許て歌人の多きと歌乃下野
一歌よ請ふるよハよ書何れハ只あく

撰りて其の形人をす免をけし
よまきせし金園まなひ乃ら成
多かりて形もふ白く山嶺のやまを
善ひてんあ後まよくとて之ハ又
うれまこと少きを母神

明治三十九年二月

子爵白田忠友



白田忠友書

緒言

一 下野百人一首としも名つけたるハわか下野に
すめる人々の詠る歌をあつめて二千八百首に
あまれる中よりめてたきを一人ハ一首つゝ撰
ひ出たるものなればたゞにかく名つけたるな
り

一 作者ハ始にハわか下野ハ本籍のある人々の歌
をのみ撰はむとせしか猶思ふに然のみハえあ
るましけれハ年久しく下野に寄留し居らるゝ
人々の歌をもえりつらねたり又下野に本籍の
あるもとるへき歌なきハとらす

一 順序の貴賤の差別にかゝらしたゝに題の順序に志たかひて即ち新年の歌を始として四季戀雜の題によりて志るす猶官位ある人たちの位をしるせり

一 明治三十年一月 下野百人一首の編輯者志るす

心出式はなるを百人一首の編輯者志るす

志るす中人一首の編輯者志るす

志るす人々一首の編輯者志るす

一 不裡百人一首の編輯者志るす

辭言

下野百人一首

本居豊穎 関
猿山義明 編輯

新年對山 春の古橋平八郎
つねに見し不士の高ねもあら玉の
年たつけさいめつらしきかか

若菜 金田知明
はるあさみ廣き野中をたつぬれと
せはき袖ふもわかかたまらす

霞

寺内精四郎

とほ山のみねのしら雪いつきえて
あしたのとけくらすみ立らむ

餘

寒月

金子文雄

あまくものいつこに冬の残らん
またさえらへる春の夜のつき

残

雪

從七位中務根 明

咲そむる花かあらぬかうたかひの
またとけやらぬ峯のしらゆき

残

雪

安藤太四郎

うくひすの聲さへ寒したにうけ
またきえのこる雪ふうくして

田

家梅

黒子隆直

みやこふら遠き山田の草のいほも
うめゆゑ人にとわれつるらか

柳

大出眞雄

むすほれしこるも春の風ふけ
のとらふとくる青やきのいと

若し草 白井綱四郎
春さめのふる野ふ生ふる若くさも
つゆのまにこそ色まさりけれ

山 春 月 池 澤 清 弘

ひろりを花にゆつりて春やまの
つきをおほろに霞むふりけり

春 雨 西山 眞行

あをやきのいどに玉ぬく露ふくも
ふるともわうし軒のはるさめ

春 曙 関口伊三郎

あまつ空かすめる不士の雪見えて
みつおと遠しはるのあけほの

水郷 春 曙 川田 爲 則

花鳥のいろ音をこめてあけほの
かすみにうかふ川つらのさと

野 春 望 前 澤 忠 晴

くさも木も春をあらそふ武藏野の
野末にしろし不士のとほやま

野邊のあそびよけふ暮せとや
かへるへき道のかすみを隔てたる

手をらんとひけのこほれて朝露の
はふの盛りをぬるさゝりけり

深き山花のふりけり
わけ入れの分いるまゝにみ山路の
ふかき花のほひなりけり

故郷花のふりけり
ふるさとに冬枯たにもゆかしきを
そふさく春にふりまけるかな

夕落花のふりけり
ちる花のひとひら毎にこゝろさへ
そへてもさそふ夕あらしかか

春夕のふりけり
木末に月ものほりてうめかをる
春のゆふへをふりにたどへん

春の野 上野正訓
志つのめか若菜つむ野に聞ゆかり
かすみをもるうくひすの聲

春の海 青木友彌

いせの海や梅のはな貝さくらかひ
ひろふ少女かそてもうをめぐり

首の夏風 川島春子

いとほれし風も嬉しくかりにけり
もなも若葉にうはりはつれは

残の鶯 小山倉龜吉

卯の花にかくうぐひすの聲さけは
はるをへたつる垣ねともかし

雨中新樹 中新井嘉二郎

今朝見れは花のこらて山かけの
青葉のさくらあめかをるふり

待郭公 坂田兵藏

梅雨のくもははれまもあるものを
ひとこゑもらせ山ほととぎす

夕 郭 公 柴 眞 住
たひ人も宿りもとむるゆふつきに
かくほどきすいつち行らむ

夜 郭 公 齊藤道太郎

明けぬまと啼渡るらんほときす
うする、月のすゑのひとこゑ

梅 雨 久 關口寅吉

とふ人いたえてほとふる五月雨に
くものゆき、絶る間をかき吉

水 鶏 猿山古恵子

月かけもほのかに見えて川添ひの
やかきのしたにくひか啼かり

蓮 野澤宇平

濁りにおしまぬはちすの花の色
のきよきにあらへ人のこゝろも

雨 後 蟬 若 菜 倭

雨すきて森のこすゑにふくせみの
こゑより落る木々のしたつゆ

夕立晴
田卷直吉
夕たちのすきの木蔭にちる見れ
つゆも夏ふきこゝちこそすれ

月下泉
中島靖
ころしてくめや里の子山の井の
そこにかけてすむ月やくたげん

樹下泉
越路眞幸
松か根にすゝしきしめて岩しみつ
あつさをよそに流しつるか

松下泉
長江要作
なつふかみ松の木かけの山しみつ
くむ人かけもしけくなりつ

夏野
松本藤左衛門
草ふかき夏野のをかへ見えねども
したかつかしき水のおとるか

夏山家
櫻井花満
せけりあふ若葉のやみに夏の夜
あけてもくらし山かけのいほ

初秋
松かせもおと吹かへてわひひこの
そてをたつぬる秋の來にけり

田家早秋
はしり穂のそよきに秋の風見えて
ゆふ月すしをやま田の本さと

女郎花
女郎花いろめく野へにひと夜ねむ
露のぬれきぬ身にけ着るとも

閑居
八重むくらしけれ庭のしら露
はらふ人ふみきゆるときふし

初雁
今朝はつ雁のふきて來にけり
まつ人にあらぬものから珍らし

海邊
つきよみうらなみさむき秋かせを
つはさにかけて雁の來にけり

深^ニ夜^ノ虫^ハ沼^ノ部^ノ信^ノ輔^ノ
燈^ノ火^ノ消^レえしまくらにのこりけり
きゝすてゝねしよひの虫のね直

閑^ニ居^ル虫^ハ柴^ノ喜^ノ代^ノ
世^ノの憂^ハひさかしとしめし草の庵の
のきはにしけく虫のふくらん吉

旅^ノ宿^ハ鹿^ノ川^ノ島^ノな^カ子^ノ
家^ニに^シて^キく^タに^秋の^かな^しき^を
あ^いれ^旅ね^のさ^をし^かの^こゑ^干

秋^ノ夕^ノ山^ノと^猿山^ノ淑^ノ正^ノ
秋^ノかせに尾花かみよるゆふまくれ
野邊もさひしく見え渡るかか

山^ノた^かみ^松の^木の^間に^見え^そめ^て
あらしをのほる月のさやけさ

池^ノ月^ノ龜^ノ田^ノ源^ノ之^助

池^ノ水^ノに^こり^にか^けハ^やと^せと^も
きよきや月のこゝろふるらむ

山家月關口喜十郎

むら雲のかゝるを見れば山さとも
うき世におかし秋の夜のつき

月照流水勅使河原正勝

山かへの岩きりとほしゆくみつに
ふかれぬ月のかけのさやけさ

夕霧若菜善作

むら鳥の木末にやとるこゑはして
きりにくれゆく山もとのさと

菊奈良部米吉

このへふ咲にほひたる菊のはか
露もあたにほおかしとそ思ふ

暮秋小林竹子

あがつきのらねを限りとゆく秋の
そらにのこれる月のさひしさ

不士暮秋山崎榮三郎

あきにつけふ別れ惜みてこゝろかさ
雲のゆくへもあらしめけるかさ

秋山 坂田藤十郎
天つそらくものほれたる秋の日よ
不士のたかねの雪を見るかな

秋旅 飯塚廣吉

たひころも袖ふきうへす秋うせふ
あらめてけりふる里のそら

秋旅 増田直吉

かへるさらいつと白露けふもまた
たもとよらけて秋うせそふく吉

初冬時雨 磯谷良節
うかりつる秋を送りてほどもふく
また袖ぬらすはつくれかな

連夜時雨 關根英晴

木の葉ちる音もそれかと思ふまで
いく夜時雨のねさめとふらん

川落葉 寺内順之助

大井川ふみまにうかふもみち葉や
ふかれし秋のうたみなるらん

寒草霜
今朝見れハ千草百くさられふして
しもの花野となりけるうか

枯雨野
野へ見れハ秋のいろあき霜かれに
むしのなく音も残らさりけり

千鳥
あら涙のよせてハかへる磯さきに
おり立かねて千とりなくなり

水鳥
さゆる夜ハ水のとこのうきねをも
おもひやらるゝ水とりのこゑ

島雪
はるかなる沖つしまねハふる雪に
うつもれてこそ顯ハれにけれ

松上雪
おほ空ハみどりに晴てやまゝつの
木末さやかにつもるしらゆき

關根平藏

竹林雪 佐山常七
ふりつもの雪にこそしれ竹むらの
折ぬみさをのちからつよさを

峯炭竈 大出豊吉

けふりさへ年の寒さにあらはれぬ
まつよりおくの峯のすみかま

歳暮 新村岩次郎

よとみかく月日流れてせきあへす
またとし波やこえむとすらん

翻式冬翻の山 鈴木安壽

草のかれ木の葉のちりてふる雪に
ふゆふかくのみふる山路かか

寄鳥戀 中根勢伊子

忘らるゝ身をうくひすの音に立て
おもふあたりの花にかかはや

塵 大金玄僊

ふみまふつくるの上におる塵の
わかおこたりの積るかりけり

煙のありとも見をぬ谷かけの
すむ人のありとも見をぬ谷かけの
松の木の間につけふりかた

海邊の煙の芥川田孝子

ひとしほのあはれを添てうす墨の
えしまの浦にたつけふりかた

筑波山やるる山青山安房

世の人の目につくはねの雲さりの
晴たる時の名にこそありけれ

清見かうらのけしきふりけり
旅人をせきもりからてとむるわ

清見かうらのけしきふりけり
旅人をせきもりからてとむるわ

閑居の音さ齋藤半作

さしふれて門こそあけねとふ人を
かからす厭ふこゝろからねと

閑居の音さ齋藤半作

柴の戸ののきのゆふ風ふくたひに
こゝろのちりも拂ひこそすれ

閑居絶是非

梅園春男

さかしらに世の善悪はいはめやど
おもひとちたる草のいほかり平

林下幽閑
伊藤五郎

庵しめし松のはやしにねさめして
おつるふる葉の音をこそきけ

浦浪をひろらに
久保守一

うへ社千代のものごと見えけれ
浦浪をひろらにしめてすむつるは

隠士
小曾戸武雄

しら雲のふかき谷間にかくれすむ
こゝろのおくをしる人そおき

猛虎一聲山月高
岡田順平

とら吼る谷間のあらし小夜ふけて
月かけたかしひまらやのやま

鏡
青山兼助

うつし見る鏡のかけはかへれども
老せぬものゝこゝろなりけり

車 峯 岸 平

時の間に千里をはしるくるまこそ
すゝみ行世のすかたかりけれ

月夜 讀 式 書 心 野 崎 宗 英

分入れはなほおく深くにほふかり
ふみのはやしの花のしたみち

夕 鐘 人 村 野 永 眞 軒

松風やいかにくらんをちごちに
おと定まらぬいりあひのかね

旅 窓 燈 柴 戸 づ る 子

月見むとあけつる窓のともし火の
こゝろありてや風に消ゆらむ

多 述 懐 山 義 喬

かしこくもわかおほ君のみ民を
おもへは嬉しかすふらぬ身も

心 述 懐 飯 島 幸 三

何こともおくれかちなる老の身に
まつしるものゝ寒さをりけり

月前述懐
見る毎に老を
むかふもか
かし秋の夜
のつき

嬉しくもこ
さめて後こ
嬉しくもこ
さめて後こ

神み祇つ風かぜ正ただ位い呼よ田の定ちやう芳よし
浪なみししつつみみののららみみのの心こころももななここむむらん

不盡の山

祝

荒川権八

御代のさうえそ果あうりける

御代のさうえそ果あうりける

御代のさうえそ果あうりける

御代のさうえそ果あうりける

御代のさうえそ果あうりける

御代のさうえそ果あうりける

御代のさうえそ果あうりける

御代のさうえそ果あうりける

御代のさうえそ果あうりける

言間 我宇都宮に行幸ありける時友鶴といふ御馬に召させたまへるを拜みて

正七位 戸田香園

友つるの天かけりゆくかけにさへ

御代の千歳にあふかるゝかふ

憲法發布の日詠る歌の中に 伊東久賢

あさ霞千代田の御城にたちしより

とくに春ふるきみか御代かふ

不盡の山をふりかへて女もあはれ

下野百人一首終山を臨みかへて荒山歌八

明治三十年六月十日印刷

みづからの歌をあくるはいとをこかましけれと
員外として一二を志るしそふ

猿山義明

新年日

あら玉のどしたつ空におほ御代の
ひかりをそへて日の昇るらむ

閑居秋夕

世のうきを思ひ捨てもかなしきは
ともかきやどの秋のゆふくれ

1001975356

版權所有

明治三十年六月十日印刷
明治三十年六月十五日發行

編輯兼發行人

印 刷 者
印 刷 所
發 行 所
發 賣 所
發 賣 所
發 賣 所

定價金拾七錢

猿山峯松藤原義明

櫻井新

明文社活版所

猿山丘

吉田

內山

城山

歌
世のひとのこゝろの春に咲いてし
こはの花はちるときもなし
心は正しく
山は平
猿山 義明

X

上
理
藏
書

X